

- 1 教育事業名 「体験！どきどき防災キャンプ」
- 2 ね ら い 被災した後の避難所生活において自分に何ができるのかを、災害に関する知識を学んだり、被災後の疑似体験をすることで防災に対する意識を高め、自ら考えて動ける子供達の育成を図る。また、より深化し、特色ある防災プログラムを開発することで、学校や地域に普及啓発し国土強靱化につなげていくことを目的の一つとして、琉球大学と連携協働しながら調査・研究を行う。
- 3 期 日 令和3年12月4日（土）～12月5日（日） 1泊2日
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 沖縄県在住の小学生（4年生以上）及びその保護者 20名程度（保護者含む）
- 6 参加人数 20名
- 7 参加者内訳 小学生20名 男子10名、女子10名（4年生16名、5年生3名、6年生1名）
- 8 講師 城間 吉貴氏（琉球大学教育学部講師）
- 9 実施プログラム

		13:00	13:30	14:30	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00
12/4 (土)		入所・ オープニ ング	講話 「災害の 時の心構 え」	実習① 「防災グッズをつく てみよう！」	ドボン料 理(調理 実習)	(ド ボ ン 料 理)	ゆとりの 時間	入 浴	就 寝
12/5 (日)	6:30	7:30	9:00	12:00	13:00	14:30			
	起床・ 清掃	朝食 (食堂)	ゆとりの 時間	実習「防災体験②」	昼食 (食堂)	ふり返り	エン デ ィ ン グ		

10 事業の様子



防災リュック（参加者発表）



防災リュック（見本）



段ボールベッド作成



どぼん料理



ペットボトル蛇口作成



備蓄倉庫見学



アンケート記入



エンディング・発表



参加証授与

11 エピソード（参加者の声、アンケートより）

【参加者（生徒）の声】

- ・いろいろな知らないことをわかりやすく教えてくれたりして楽しかった。
- ・どぼん料理は、ちょっと失敗したけれど、みんなで協力してがんばれた。
- ・体験を通して、難しさや苦しいことがいろいろとわかった。
- ・備蓄倉庫の中を見ることができたのがよかった。勉強になった。
- ・水と食べ物だけじゃなくて、毛布とかトイレとかがあるのがわかった。
- ・観光客の分まで食べ物などがあることがわかった。
- ・防災リュックの中を見ることができて想像しやすかった。
- ・学んだことを家族にも伝えたいと思う。

12 担当者所見

（1）成果

- ・講話の中で、「防災リュックに入るかどうかではなく必要なものが入る防災リュックを準備する。」ことや、「その上で、いざという時に持っていけるかどうかも大切。」「体重の3割くらいのものが望ましい」等、防災リュックについての知識を得ることができた。
- ・サバイバル3の法則「3分間呼吸ができない 3時間体温が奪われる 3日間水が飲めない 3週間食べ物がない」と、命の危険があることを学ぶことができた。
- ・段ボールベッドを仲間と協働して作成することで助け合いの大切さを知ることができた。また、体育館にて段ボールベッドで集団宿泊をすることで集団の中での行動について考えることができた。
- ・どぼん料理に挑戦し美味しい食事を自分たちで食することができた。全てがうまくいったわけではないが、お互いをサポートし合う姿がみられた。
- ・ペットボトル蛇口を作成することができ、実際に使用することで被災現場での水の大切さを知ることができた。
- ・防災備蓄倉庫の見学や講話を通して、地域の防災に対する準備や備蓄に関する意識の高揚が見られた。
- ・事業を通して子供たちは互いに交流しながら協力し、様々な体験活動をする中で、それぞれが新たな知識と経験から、防災に対する意識を変化させることができた。
- ・事業を通して学んだことを家庭に持ち帰り、家族と共有しようとする意思が見られた。参加者だけでなく参加者から身近な人への波及効果も期待できる。

（2）課題

- ・被災した際の避難所での生活を少しでも体験してほしい思いから、段ボールベッドを使用し体育館で宿泊をしたのだが、本事業が1泊2日の日程であるため、お泊り会のようなとらえ方をしている一部の参加者がみられた。
- ・被災した際の事の重大さを、もう少し小学生にわかりやすく伝える必要があると感じた。
- ・行動の変容についての尺度（評価？）について、検討する必要がある。
- ・対象が小学生ということもあり、わかりやすく「災害前→災害発生→災害後」と、時間経過に沿ったプログラムを意識する必要がある。特に、今回の企画では災害発生という要素が足りていないように感じた。
- ・どぼん料理のメリット（洗い物が減る、暖かい料理のありがたさ）をうまく伝えられなかった。片付けを参加者に体験させたり、避難時の食生活を想像させることで改善できるかもしれない。
- ・家庭で防災リュックを準備するために簡単な防災ガイドブックなどの副読本があると良かった。
- ・災害によってライフライン（水・電気）が失われるというイメージが湧きにくかったと思われる。参加者に節水や節電の必要性をもっとイメージさせる必要があった。